

パリから見えるこの世界

Un regard de Paris sur ce monde

第43回 ピエール・アドー、あるいは「哲学への改宗」

「古代人にとって哲学とは体系の確立ではなく、生きる選択であり、変化の必要性である。

・・・わたしはいつも哲学を世界の捉え方の変容と考えてきた」

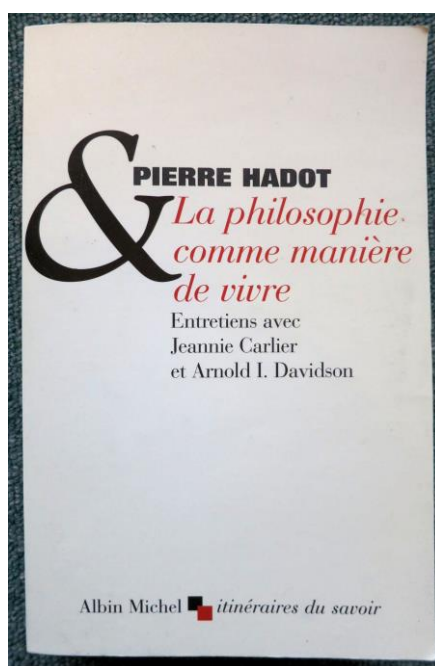
——ピエール・アドー

昨年12月、山あり谷ありの6年に及ぶドクター・コースを終えることができた。マスターから数えると8年を超えるパリでの大学院生活となった。それは、哲学という新しい領域を、パリという新しい町で、僅か6年ほどの付き合いでしかなかったフランス語で学ぶという大変な生活であったことを意味している。三重苦とも言えるこの時間を振り返ると、そこに絡んでいた重要なテーマがいくつか見えてくる。それはわたしにとっての発見であり、それ以前には見られなかったものである。このまま放っておくと、そのテーマが加わった新しい状態はずっと以前から自分の中にあるものだと錯覚するようになり、大きな意味を見出せなくなる可能性が高い。そのため、一つの区切りを終えたばかりのこの時期に見直しておくことが重要であると考えた。これから何回かに分け、パリでの学生生活に纏わるテーマについて現時点での見方を纏めておきたい。初回は、哲学に入る発端に絡む重要な言葉を残していた古代哲学の研究者ピエール・アドー (Pierre Hadot, 1922-2010) 氏について触れてみたい。

2006年の暮れ、これからの可能性を模索するため、わたしはパリに向かった。いくつかの研究者にメールを出したものの殆どが無反応であった中、科学哲学の大御所と目される方が話を聴く用意があるとの連絡をくれたからである。その時点での考えは、どこかの哲学関係の研究室に身を寄せながら、持てる時間のすべてを使って自由に観察し、考えたいというぼんやりしたものだった。哲学とは何なのかについての確たる考えがある訳でも具体的なテーマがある訳でもなく、ただそれまで意識下にあった哲学に対する興味だけは沸々と湧いてくるという状態にしか過ぎなかった。

ランデブーはその年も押し迫った27日、静まり返った大学で行われることになっ

た。部屋に入ると、温厚そうな顔がわたしを迎えてくれた。そして、博士は「わたしに何を求めているのですか？」と切り出した。フランス語を始めてから今に至るまでの心の軌跡を説明し、これからの希望を述べると、いろいろなセミナーやワークショップに参加しながら考えるというやり方もあるとのお話であった。その会話の中で、今は思い出さないのだが、わたしが何かを言った時、博士は驚きと好奇心が入り混じった表情で「あなたは学生になりたいのですか？」と訊いてきた。勿論、自分の中ではそんなことはあり得ないと思っていたので、学生になるなどという考えは微塵もなかった。しかし、その言葉に触れた時、わたしのような者が学生になることに何の不思議も感じない人間がこの世界にいることに驚き、「人生、まさに何でもありだ」と思ったのである。実際には博士のところに身を寄せることにはならなかったが、学生という身分があり得ないものではないこと、それ以上に、フランスに長期滞在するには学生になる以外に方法はなさそうだということに気付かせてくれた意義深いランデブーとなった。



『生き方としての哲学』

この滞在は他にも多くのものを齎してくれた。その一つが、今回テーマとしたピエール・アドー氏との遭遇であった。ランデブー前夜、散策に出た。その時、ホテルの隣に書店があることに気付き、その中に入った。チャン書店 (Librairie Tschann) である。そこの哲学セクションを眺めている時、当時の心境に訴え掛けるような『生き方としての哲学』というタイトルが目に入って来た。 *La philosophie*

comme manière de vivre (Albin Michel, 2001) である。その著者がアドー氏だったのである。

早速、ばらばらと捲っていくと、人生の見方や哲学の捉え方に共振するところがあり、驚いたのである。当時のぼんやりとしたイメージは、哲学が目指すのは概念や体系の確立ではないかというもので、もしそうであればわたしには余り向いていないかも知れないという危惧を抱いていた。しかし、アドー氏の言葉にはその危惧を払い退けるに十分な力があつたのである。今回のエピグラフもその一つだが、同様の考えを持つ哲学者としてベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) を挙げ、その言葉も引用している。

「哲学とは体系の確立ではなく、自分自身の内、自分を取り巻く世界を何ものにも囚われることなく観ることを一度決意することである」

これらの言葉は哲学には体系の確立とは別に、生きることと直結したやり方があることを示すもので、それまでのわたしが抱いていた哲学のイメージを一変させることになった。つまり、哲学はわたしにとって異質な道などではなく、寧ろ最も自然な道であると認識できるようになったのである。当時、次のような何気ない一節にも強く反応していた。

「この点について、わたしは若き日に教えを受けた枢機卿ニューマン氏に影響を受けた。彼は『同意の基本原則』という本の中で、観念的な同意と現実的な同意を分けて考えている。観念的な同意とは、抽象的に支持する理論的命題（例えば、 $2+2=4$ というような数学的命題）の同意のことで、われわれに何事をも促すことのない、純粹に知的なものである。それに対して、現実的な同意はすべての人を促すものである。それは、支持する命題がわれわれの人生を変えうるものとして理解されるのである」

この中の「促す」という表現が使われている部分で、「もの・こと」を理解する時にも二つのやり方があることを明確に意識できるようになり、科学もその中に含まれるだろう観念的な同意に対して、現実的な同意というやり方にも促されることになったのである。

博士はまた、生きることについて次のような言葉を残している。

「現在に生きること、それはこの世界を最後のものとしてのみならず、初めてのものとして見るように生きることである。世界を恰も初めて見るように努めること、それはわれわれが持っているいつもの型に嵌った見方を排すること、在るが儘で囚われのない現実の見方を取り戻すこと、日頃見逃している世界の素晴らしさに気付くことである」

「現在への集中」、さらに言えば「目的の拒否」にも繋がるこの生き方は、いろいろな思想の中に見られる。わたし自身、このような見方を以前から採っていたと思われるが、それが意識に定着されてきたのはアドー氏の言葉に因ってであった。その点でも大きな意味を持つ出会いとなった。



滞在したホテルからモンパルナスタワーを望む

この時初めて、この塔の美しさを発見した

(2006年12月23日)

1922年、三人兄弟の末っ子として生まれたアドー氏は、子供時代をランス (Reims) で過ごした。カトリックの信仰心が強い母親の下、二人の兄と同様に神学の道に進むべく厳しく育てられた。ルールの上を進むようにその道に入ったが、創造性が抑圧されているような感覚と実世界から隔離された環境に違和感を持つようになる。1950年に出されたローマ教皇ピウス12世 (Pope Pius XII, 1876-1958) の保守的な回勅に触れた2年後、信仰の世界から離れ、哲学に入っている。彼は、これを「哲学への改宗」と表現している。それからは自由に考える解放感を味わいなが

ら、プロティノス (Plotinus, 205-270)、エピクテトス (Epictetus, c.55-135/140)、マルクス・アウレリウス (Marcus Aurelius, 121-180) などの古代の哲学者の研究に勤しむことになったようである。



アドー氏が亡くなったことをモンペリエで知る

ソーランブ(Sauramps)書店にて

(2010年6月18日)

アドー氏の著作に触れて最初に反応した言葉は、「*Les exercices spirituels*」であった。スペインのバスク地方出身でイエズス会創設者のイグナチオ・デ・ロヨラ (Ignacio de Loyola, 1491-1556) の著作にも同名のものがあるが、日本語訳は『靈操』となっている。靈の体操、魂の運動という含みになるのだろうか。ロヨラの場合、靈という言葉は宗教的な意味合いで使われている。アドー氏は、この言葉に宗教的な含みのない知性、想像、意志による運動を見ている。さらに、その運動の中に、世界の見方の変更を迫り、自らの生き方にも変化を及ぼす力を見ている。この精神運動自体は古代から存在していたが、アドー氏が言う意味でこの言葉を甦らせたのは16世紀のモンテーニュ (Michel Eyquem de Montaigne, 1533-1592) だと言われている。アドー氏が共感していたゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) の「今に生きる」、あるいはル・モンドの創業者ユベール・ブーヴ・メリー (Hubert Beuve-Méry, 1902-1989) 氏の「シリウスの高みから観る視点」においても重要になる運動である。さらに言えば、ミシェル・フーコー (Michel Foucault, 1926-1984) が「自らを芸術作品とする」という意味を含めた「存在の美学」、あるいは「自己への配慮」とも関連して来るだろう。これらはいずれも知的な側面の配慮 (だけ) ではなく、生きることに関わる配慮を意味するものであった。

これらの背景から浮かび上がる哲学の二つの流れは、理論 (*theoria*) と実践 (*praxis*) の対比として見ることもできるだろう。前者は中世に大学が生まれて以来主流になって来た体系の構築を目指す哲学、知に重点を置いた哲学、さらに言えば職業としての哲学と対応し、後者は古代には一般的だったが、次第に前者に浸食されていった生き方に直接絡む哲学に繋がるだろう。必ずしも明確には区分できないが、理論・体系派の哲学者として、デカルト (René Descartes, 1596-1650)、カント (Immanuel Kant, 1724-1804)、ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831) などが挙げられ、多くの専門領域に留まる現代の哲学者もこちらに属すると思われる。一方の生き方に関わる哲学を展開した人には、ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer, 1788-1860)、キェルケゴール (Søren Kierkegaard, 1813-1855)、ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900)、ベルクソン、カミュ (Albert Camus, 1913-1960)、フーコーなどが挙げられるだろう。



9年振りに訪れたチャン書店

モンパルナス大通り

(2016年2月1日)

アドー氏は「改宗」について次のように論じている。改宗という言葉の語源から見ると、ラテン語の *convertio* は二つの異なる意味を持つギリシャ語を根に持っている。一つは、「根源に戻る」、「自己に戻る」という意味の *epistrophe* で、もう一つは、「思想の変更」、「悔い改め」を意味する *metanoia* である。つまり、改宗には、「原点回帰」と「再生」という異なる意味が内包されており、エピグラフと併せて考えると、アドー氏の哲学は取りも直さず改宗であることが分かる。つまり、日常との断裂により可能になる自己回帰であり、それによる自己再生が哲学なのである。アド

一氏による改宗後の生活は「真の生活」とされ、世界を正確に理解し、自己の認識に達して内的な苦しみから解放された平穏と自由を得た状態を指している。最後の状態に至るには、自己の認識と世界の理解が前提になっている。内的平穏と自由を得るためには、知識と理論が欠かせないことが分かる。確かに、古代の哲学者には心を如何にコントロールするのかを考えた人が少なくないが、その元には理性的な分析があった。このような理解に達すると、当時は気付いていなかったが、ほぼ 10 年前にわたし自身も哲学への改宗を経験していたことが見えてくる。古代の哲学者に親和性を感じるのは、理論と実践が合体していた時代の哲学に対するノスタルジアのためなのだろうか。

ところで、先月初め、思い出のリブレイを 9 年振りに訪れた。どのような心境になるのかに興味を持ったからである。中に入り暫くすると、記憶の奥に眠っていた場所を引き出すことができた。しかし、懐かしさを感じることはなく、いつもと同じようにいま興味を惹くものを探して歩き回っていた。まだ、パリという町に住んでいるからだろう。そして、運命的な出遭いのあったその場所には *Marx & Foucault* (La Découverte, 2015) が置かれてあった。まさに、理論と実践を考えるに相応しい著作が 9 年後も同じ場所に現れたのを見て、感慨深いものがあった。

(2016年3月10日)